

Foucault の微分幾何学

——権力分析の文体論——

橋爪大三郎

権力を最も現代的に追究したFoucaultの方法論的主著「知の考古学」は、特徴的な微分幾何学的語法に満ちている。これは、構造主義（以降）の権力分析の文体として、注目に値しよう。

Lévi-Straussは、Bourbaki的数学観に拠りながら、変換に関して不変な、<構造>の概念を樹立した。ことに、前期の親族研究では、局所から、全域の<構造>へと遡及する、射影幾何学的手法をとっている。Foucaultは、この手法の延長上で、社会をみだす不定型な権力について、間接的な実証法を試みる。これが、微分幾何学的な文体にもとづく言説分析、すなわち、知の考古学にはかならない。

Foucaultのこの文体は、明白な利点と欠陥を持つ。彼がその文体を通して黙示的に語ることを、明示的なモデルの形にとりだすことが、われわれの権力理論の有益な出発点となろう。

1. 権力論の困難
2. 構造人類学の文体
3. Lévi-StraussからFoucaultへ
4. Foucaultの微分幾何学
5. 権力分析の文体
6. 権力の理論へ

1. 権力論の困難

本稿は、権力現象の社会学的考察に、着実な一歩前進をはかろうとするものである。

これまで、権力は、はなはだ不器用に論じられてきたか、あるいは、ほとんど論じられてこなかった。社会科学の伝統的な接近法によっては、権力現象は、掴みづらい雲のようなものとうつつ。そこで、われわれはまず、権力論の困難を確認する作業からはじめる必要がある。

権力論が困難な領域として残されたのは、近代の社会理論の範式のもとで、権力の概念が矛

盾を孕むほかはないからである。一方で、社会の個々の成員は、独立な主体とみなされる。かれらは、自由な意志を持ち、自己決定する主体である。他方で、権力は、一群のひとびとに、拘束的・不可抗的に作用する、とされる。こうした社会に権力が存在できるだろうか？

近代の社会理論は、成員が自由な主体であることを前提とする、いわば「主体の形而上学」の圏内にある。厳密にこれに立脚すれば、権力はそもそもあるべからざるものということになる。ここからたとえば、ひとびとの意志を実体的なものともみなし、「権力は本当は、実在しない」と考える、「権力=意志の代理機関」説がうまれる。また、「社会が完成すれば、権力は存在しえない」と考える、「権力=国家の死滅」説がうまれる。

しかし、こうした考え方は、どこかおかしくないだろうか？ 前者は、一般に意志の代理は不可能であるという、Arrowの定理の批判にさらされており、後者は、Marxの予言が外れたことで信憑性を失っている。

この種の言説のとどこかめところで、権力は敵然と作動している。権力は、ますます高度なテクノロジーの衣裳をまとい、変貌を続けているのに、れわれは有効な理論的接近をもっていない。

したがって、まず必要なことは、「主体の形而上学」を離脱し、権力の概念規定をやりなおすあたりから出発することである。そのためには、文体上の革新がもとめられる。この事情は、権力論の重要な先行業績である M. Foucault の「考古学 (archéologie)」を検討するとき、如実に明らかになる。

2. 構造人類学の文体

社会理論における文体上の革新者として、われわれは、C. Lévi-Strauss にあらためて注目することができるだろう。彼は、権力を直接に論ずることはなかったが、いわゆる構造主義の基本的なテーゼを確立することを通じて、Foucault から後続するひとびとびとに議論の範式を与えた。

Lévi-Strauss のいう〈構造〉は、難解な概念と受け取られている。それは、どの社会成員によっても明瞭に意識することはできないが、彼らの言動を拘束する秩序である。この秩序への迫真が、彼の構造人類学の一貫した主題であった。初期に彼は、「親族の基本構造」で「一般交換」を発見し、後期に「神話学」で「神話論理」を発見している。これらがともに〈構造〉だといえるのは、いずれもがある変換 (transformation) に関して不変なものだから、すなわち、Bourbaki 的な意味において、なのである。こうして彼は、さまざまな社会の並立を変換群と想定することにより、そこに集成的な規則としての〈構造〉を発見する。彼の構造人類学の

文体は当然にも、脱主体的・脱中心的なものとなり、主体と解放の弁証法に拠ってたつ Sartre と対立するにいたった。

さて、Lévi-Strauss が〈構造〉を実証する仕方を見ても、前期と後期とではやや異なることがわかる。後期では彼は、各神話 (データ) を異本 (variations) と考え、それらの間に変換を想定する。そこから野生の思惟を支配する〈構造〉を抽出するのは、彼の代数学的「手並み」である。それに対して前期では、むしろ射影幾何学的方法が、自覚的にとられていた。すなわち彼は、いわゆるタブー (社会空間の局所的データ) を、親族の〈構造〉 (社会空間の全域における未知の秩序) の射影 (projection) と考えるのである。それゆえ、〈構造〉に達するには、この射影の逆像をとればよい。ここでの〈構造〉は、親族システムとして抽象された、社会空間の有意義な〈構造〉 (諸身体の配列の様式) であって、神話システムの場合 (純然たる形式) とは異なっている。

「親族の基本構造」における、実証の方法の実際を、みてみよう。Lévi-Strauss は、限定交換システムと一般交換システムの2つを扱っているが、ここでは後者を例にとる。

彼は、まず、その社会の親族呼称 (kinship terminology) の体系を整理・分析し、縮約モデル (図1) へと圧縮する。親族呼称の体系は、当人を中心にした (ego-centered) 社会空間の見取りにほかならないから、である。つぎに彼は、縮約モデルを、〈構造〉の射影として理解する。この射影は、メルカトル図法の投影とよく似ている (図2)。その中心 (赤道半径) にあたる部分には、一般交換の円環が位置し、それを取りまく呼称の体系は、周辺部が歪んでいる。さいごに、これら局所的なデータから、一般交換のサイクル=〈構造〉の存在が実証される (

Lévi-Strauss
[1949→1967:421]

成員の各人からみると、
社会は'平面'にみえる。

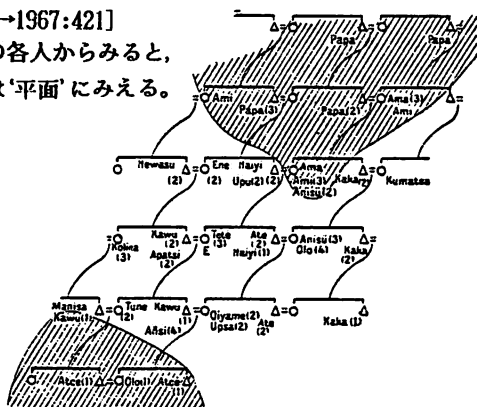
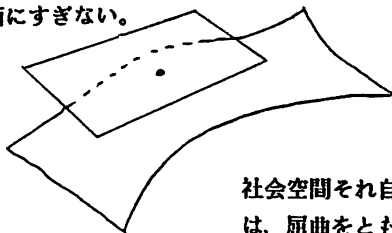


Fig. 68 - Système Mtiwok
Corrélations entre les généalogies et le modèle réduit.

<図1>
縮約モデル

しかしこれは、各人が
自分の近傍に描いた、
接平面にすぎない。



社会空間それ自体
は、屈曲をともな
った多様体である。

図3)。こうした理解によれば、それまで単に
非合理的なものとしかみなされていなかったタブー、
ことにイトコ間の非対称性(交叉イトコ/
並行イトコ)の謎が解決される。

このように、一方で、社会空間の局所的な様相
(諸身体の<性>的空間)、もう一方で、全
域的な<構造>(政治=経済=文化的な統合の
秩序)、この2つの記述が区別され、互いに実
証的に関連づけられた。これはあきらかに、文
体上の革新の出発点となる。そこでは、要素的
な主体=人間の概念が解消されている。*

*Bourbakiからの影響は、「親族の基本構
造」の付録を担当したA. Weilを経て、
直接に、Lévi-Straussに及んでいる。

:220]

<図2>

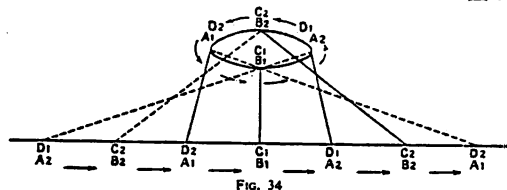


Fig. 34

:219]

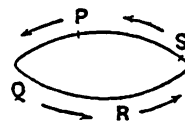


Fig. 33

<図3>

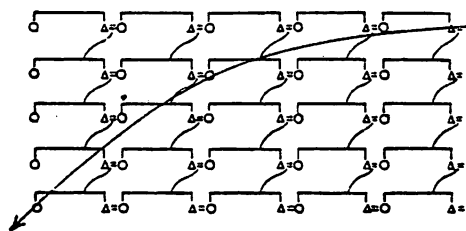


Fig. 85 a - Mariage avec la fille du frère de la mère (cycle long)

関係の非対称性が、空間
に曲率を与えている。

:521]

メルカトル図法



:射影幾何学的言説

3. Lévi-Strauss から Foucault へ

Lévi-Straussは、1950年代のはじめ、「親
族の基本構造」の分析をそのまま現代社会に持
ちこもうとして、挫折した。この試みは、いろ

いろいろないみで無謀なものであった。彼はそのうち、神話研究に転じたが、文体上の問題は未解決のままに残っている。

問題の実質は、こういうことである。Lévi-Strauss は、いわゆる未開社会で、彼の議論を成功させた。そうした社会では、いくつかきわめて有利な条件がみたまされている結果、社会は十分に単純で、彼の素朴な方法——位相論的 (topological) な類推——も有効だった。それに対して、われわれの社会では、‘主体’ の概念にかえてひとびとの身体の局所的な布置をどのようにとらえればいいのかも、また、そうした局所的な様相に対応すべきどのように構造を、社会空間の全域にみてとればいいのかも、いずれも煮詰まっていなかったのである。しかしじつは、そのすきまにこそ、権力が胚胎するのだ。

われわれの社会は、権力が、親族現象や経済現象や他の諸現象から単離して、純粋に作用する点に特徴がある。近代の政治制度は、こうした権力を法・言説・普遍思想その他によって攻囲し、一定の形態のもとにおしこめることを主題としている。ところが権力は、その姿を言説などそれ以外のものとの関係においてしめすのみで、それ自身としてつかまれることをのがれ続ける。Foucault は、ここであらたな工夫を開始した。彼の‘考古学’の試みが、それである。そこには、Lévi-Strauss の与えるもどかしさを払拭する、新鮮な着眼があった。

わが国で本格的に Foucault を読みこんでいる同時代人の、証言を聞こう。内田隆三によれば、《わたしの場合、フーコーの著作に近づくようになったのは、何と言ってもフランスにおける構造主義革命、とりわけレヴィ=ストロースが試みた未開親族における社会規範の分析を、主要な契機としている。》《構造主義が理論的に

見てある種の循環論になっており、規範問題を解き切れない構図になんていう限界は、当時……思考をめぐらすときの出発点のようになっていた。》《私たちに実証性の喜びを教えてくれたのはフーコーであった。……実証性の形態を確立することができない限り、社会学は批判や弁証論に同化してしまうだろう。》《今、彼は死んだと人は言うが、彼の言説が歴史のなかに切開した新しい次元はもう閉ざされることがない。》(内田 [1984b])

Foucault が Lévi-Strauss から継承したのは、その文体上の革新である。Foucault が新たに切りひらいたのは、権力を、この革新された微分幾何学的な文体によって追究する途である。

4. Foucault の微分幾何学

M. Foucault は、歴史学の革新者として登場し、‘考古学’を創唱した。このやや奇妙な命名は、ひとびとの言表やふるまいを、けっして文字どおりに読むのではなく、単なる物証としてだけ扱おうとする、彼の頑固な実証的意思をあらわしている。‘考古学’の視線は、方法的に冷めている。それは、Lévi-Strauss の人類学者としての視線を、正当に現代社会へ延長したものだ、と言えよう。

Foucault は、識字能の喪失 (illiteracy) をたくらむ。そこで、社会空間は、物証のみからなる全体として扱われることになる。Foucault は‘考古学者’として、この物証の全体を対象とする。これは、社会空間の全域へ訴求し、何によらず権力を主題的に浮上させるためにほかならない。Foucault の文体は、このため微分幾何学の語彙をふんだんに用いている。これは、従来あまり注目されなかったが、重要な点である。「知の考古学」からためしに、典型的と思

われる個所をいくつか引用してみよう。

《歴史は、記録にたいする位置を変えてしまった。……いまや歴史が第一の仕事としているのは……記録に内から働きかけ、練りあげることだ。即ち歴史は記録を、組織し、切断し、分布させ、順序づけ、レヴェルにわけ、点列(=級数)を作り、関与的なものとそうでないものを弁別し、要素を同定し、単位を定義し、関係を描述する。》

《歴史は、記録という織物それ自体のうちに、単位、集合、点列、関係を、定義せんとする。

》《歴史は、記録の物質性にかかわる作業であり、それを作品にすることである。》

L'histoire a changé sa position à l'égard du document : elle se donne pour tâche première, non point de l'interpréter, non point de déterminer s'il dit vrai et quelle est sa valeur expressive, mais de le travailler de l'intérieur et de l'élaborer : elle l'organise, le découpe, le distribue, l'ordonne, le répartit en niveaux, établit des séries, distingue ce qui est pertinent de ce qui ne l'est pas, repère des éléments, définit des unités, décrit des relations. : elle cherche à définir dans le tissu documentaire lui-même des unités, des ensembles, des séries, des rapports.

; elle est le travail et la mise en œuvre d'une matérialité documentaire (livres, textes, récits, registres, actes, édifices, institutions, règlements, techniques, objets, coutumes, etc.) qui présente tou-

(Foucault [1969: 14])

Foucault は、さらに、つぎのような術語も多用している：

集合(ensembles), 部分集合(sous-ensembles),
開/閉・有限/無限(ouverts ou fermes, finis
ou indefinis), 解析(analyse), ……

このようなFoucaultの文体は、無意味なアナロジーではなくて、必然に導かれたものである。彼によれば、歴史学の素材は、言表(énoncé)あるいは言説(=Σ言表)である。言表は、ひ

とびとの発言ばかりではなく、身体のみるまいなどでもあって、それらが生起したという事実は、痕跡によって記録される。そうした記録の全体が、彼のいう集蔵体(archive)である。考古学は、集蔵体上の微分幾何学的技法を要する。

《不連続、決壊、しきい、極限、級数、変換、といった概念を活用すればすべての歴史分析に、手続き上の問題たるにとどまらぬ理論上の諸問題を惹起することとなる。》

La mise en jeu des concepts de discontinuité, de rupture, de seuil, de limite, de série, de transformation pose à toute analyse historique non seulement des questions de procédure mais des problèmes théoriques.

(Foucault [1969: 31])

言表は明らかに、集合の要素(=点)としての位置を占めるようにみえる。しかしFoucaultは、そうした性急な類比をいさめている。言表は、積極的な実在性を具えた、要素的な実体なのではない。それはおそらく、実証家の視線と相関的にあらわれてくる、かりそめの実在なのである。集蔵体とは、このようないみでとらえがたい言表の、システムにほかならない。

集蔵体を対象とすることの困難、ここに‘考古学’の構想の最大の鍵がある。なるほど、《集蔵体とは、言表の形成=編成と変換との一般的なシステムである》にはちがいない。しかし、《ある社会の集蔵体を記述しおおせることはできない。》のみならず、《われわれ自身の集蔵体を記述するということができない、なぜなら、われわれがかたるのはそのルールの内側においてだから。》《集蔵体はいろいろな断片、局部、水準において現れるが、われわれがそれから時間によって隔てられるほど、よりはっきりするのである。》(Foucault [1969:171])

*

*あるルールに支配された秩序を記述しようとする、それとは別の秩序に移行してしまうこと、それゆえ、それを防ごうとすれば、ただルールをしめすしかないこと、…… こうした論点は、Wittgensteinや Hart の〈言語ゲーム〉論でおなじみのものである。

Foucaultは、集蔵体について語ることは無意味であり、また禁止されているように考える。そこで彼は、この集蔵体を呈示する特別の仕方を工夫しなければならぬ。集蔵体はいうなれば、ルールにもとずいた言語の集塊であるから、彼はそれを非言語的に取り扱うのでないといけない。たとえば、《考古学は、諸々の言説をば、集蔵体の要素のなかで特定された実践として記述する》(Foucault [1969:173]) ののであるが、それは、おのおのの言説が言表のどのような配列から成り立っているか、言表の並びぐあいをしらべたり接線を引いたりする作業にはかならない。こうして、《考古学とは……言説の諸様態の微分解析学(analyse différentielle)である。》(Foucault [1969:182]) 考古学の仕事とは、‘考古学的同型’など、言説の空間での様々な関数関係を抽出することにつきる(Foucault [1969:210])。

5. 権力分析の文体

構造主義(以降)の文体が、微分幾何学に接近するのには、必然がある。その理由は何であろうか?

構造主義の登場がもたらした功績のひとつは、実体的な‘主体’概念の効力を解除し、理論的言説から放逐したことにある。それはたかだかある制度として、身体を規範する線分の交点に結節するものである。それゆえ、主体をさしも

どすことのできる文体が必要である。そこで微分幾何学との類推がいとなまれる。ちょうど集合の各点(原子論的要素)が、連続濃度の多様体のなかに埋没していくように、主体もまた、言表(身体の挙動の痕跡)の空間内部の無数の考古学的形象のなかに解消されていく。

さらに、この新たな文体は、いっそう強力な実証的企図をになうことができる。すなわち、それは(主体ならざる)身体上の諸事象を記述し、それらの集合的な帰結である社会的な現実と照合することができる。それは、局所と全域とをともに捕捉する記述的性能があるのだ。

こうしたなかでも、とくに Foucault の文体——‘考古学’——は、もっぱら権力分析のために考案されたという点で、きわだっている。Lévi-Straussは、結局〈思惟〉の分析に焦点を移してしまったのだから。そこで、Foucaultの文体がどのように権力を捉えようとするのかについて、もうすこし立ちいってみきわめよう。

Foucaultのもっとも基本的な想定は、権力は、身体(のふるまい)のうえにその作用の証拠をのこすはずである、ということである。身体のふるまいとは、ほぼ言表とおなじである。したがって、集蔵体のなかから言説(=言表の点列)を掘りおこしてみるならば、そこにかつて作用した権力の様相を実証することができよう。

集蔵体とは、Foucault流の考古学的記述の対象となった社会空間である。これは、権力の作動を感知するための仕掛け、なのである。ちょうど泡箱が通過する宇宙線を感知するように、集蔵体は権力の作動を感知する。考古学的記述はそこにさまざまな形象を発見しようが、同時にそれは、権力をキャッチし分析する手続きでもある。

従来、社会は主体によって構成されていると

目されてきた。しかし、集蔵体はそうした主体からなるのではない。主体はむしろ、一連の言表の配列・編成において、権力の効果として再定義される。こうして‘考古学’は、近代の初頭において、おおいなる主体化＝臣従化の運動を発見する。

考古学的な権力分析の例として、言説分析をみてみよう。言説分析は、言説（語られたこと）の意味に内在するかわりに、その分布を観察し、その欠落部分を権力の作用による排除として発見する、などの作業を行う。これは、内容分析、解釈学、テキスト理論など、伝統的な人文学の手法とは明瞭に切断されている。

一方、権力機関や組織体などの分析にしても、新たな着眼が用意されている。注目されるのは、権力がはりめぐらした意味づけではなくて、当の権力を産出する仕掛けである。このいみで、ひとつひとつにどのような規律・訓練が課せられるかが重要であり、身体を問題化する特異な視線のありかたが復元される。

このような文体にもとづく分析は、現象学や主体の形而上学など旧来の知に対しては、当然にも、〈外の思考〉としてふるまうことになる。〈外の思考〉は、メタ思考とは異なり、もとの思考に超越するのではなく、並列する。〈外の思考〉は、もとの思考が言説編成のかたちで現存することを手がかりに、その言説にあえて内在せず、その外から考古学的分析を行うのである。

このように再構成してみると、Foucaultの‘考古学’はきわめて興味ぶかいが、その文体は、社会理論としてどのような特質を持つものだろうか？

第1に気づかれるのは、性(sexualité)と権力が連続的に、捉えられていることである。Foucaultの言表の概念は、言語と行為とを積極

的に区別せず、身体のみとて同一視するところになりたっている。それゆえFoucaultは、カトリシズムと近代の主体形成作用に反逆することを主題とし、性現象の歴史＝西欧的権力の編成史へとむかうことになった。

第2に重要なのは、‘考古学’が記述に専念するものである点である。それは、非演繹的、非理論的な作業である。Foucaultは、自身の方法を説明するいみで、やむをえず、「知の考古学」なる‘理論’的書物を著しているが、彼の仕事は本来、歴史家のものである。

自分の歴史学を、あえて‘考古学’と称するFoucaultは、歴史の物語(histoire)性を否定してかかる。なぜならば、もしもその種の歴史を語ると、語る現在に作用している権力に巻き込まれるはずだから(Foucault [1969:171])。それゆえ‘考古学’の仕事はまず、示す(mont-rer)ことでなければならなかったのである。

説明せず、ただ呈示すること——これは、博物館における陳列の技法にはほかならない。この操作は、説明するより以上の実証性を発揮する。

Foucaultの場合、社会空間の歴史的な全体(彼の考古学的な記述の対象)が、1個の(視えない)博物館と考えられ、資料(言表)はそれが出現したと同じその場所・その時点に、然るべき座標を打たれてそのまま陳列されているのである。‘考古学’の実証性＝積極性(positivité)は、まったくこの資料によって担われている。Foucaultの語ることばは、それに添えられたラベルに相当する。それは、陳列のための補助手段にすぎない。できることなら、彼はこうした言説ぬきに、この作業をなしとげたいにちがいない。

以上のような考古学的分析は、非常に巧妙な方法である。もしもここに権力分析としての限

界をみななければならないとしたら、それはどのような点だろうか？

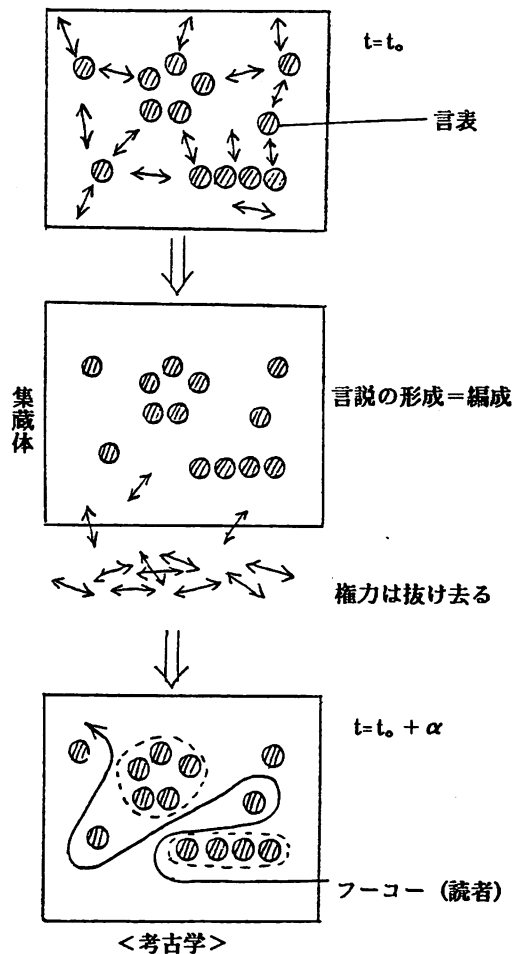
第1に注意しなければならないのは、なんといっても、考古学の文体が権力を捕捉するために払った犠牲である。考古学的分析は、権力を記述できるかもしれないが、その記述は権力と同時的であることができない。

その理由は、こうである。考古学の想定によれば、権力が現に作用しているとき、権力は言表にその影をおとしているはずである。この時点で、言説の形成＝編成が進行する。ついで、十分な時間の経過とともに、権力の作用が抜け落ちていくと、権力の効果が刻まれた言説ばかりがとりのこされる。これが集蔵体であった。そこで、考古学者としての Foucault（そして読者）の身体は、権力といれかわりに集蔵体にはいりこみ、考古学的形象の間をめぐって、その痕跡から権力を実証すべく、言説の布置・連関のあいだにさまざまな微分幾何学的線分をひこうとする（図4）。

こうした作業は、正当な考慮にもとづくものだとはいえるが、‘現に作用しつつある権力’をつかみえないという重大な限界をもつ。もしもFoucault（そして読者）が、考古学を通じて‘作用しつつある権力’についての認識を行うのだとすれば、それは、‘語りえぬ権力’についての想像力（すなわち、いささか非実証的な精神）をすら必要としてしまうのではないか？

第2に考えなければならない点は、いまのべたことと密接に関連する。Foucaultの考古学的権力分析は、権力を記述することに自己限定し、権力についての演繹的な言明を行うこと、権力についての理論を樹立することを回避する。これは、一方的ではないだろうか？

Foucaultが歴史を「物語る」ことを拒否したのは、実証性の復権のためであった。マルクス



<図4>

主義の史学の「神学」——彼らの理論的教条を史料に押しつける——から史料をまもりたい、という話はわかる。しかし、考古学的記述に集中するあまり、すべての理論的言明を拒否すると、史料操作の手段さえ失うことになりかねない。

さらに言えば、ひとはどこまで考古学的記述に徹底できるであろうか、という疑問もある。

‘考古学’とは、言語史料を、それ本来の内的視点から扱わない（読解しない）ことの宣言であった。だがこのふりは、言説に内在できる読

解能力があって、はじめてできるものである。考古学者といえども、言語の有する普遍性の内在的な理解を、こっそりと実行しているのである。それなら、考古学的形象のみならず言説の積極性をも、はじめから承認してかかるのと同じではなからうか？

6. 権力の理論へ

上記のような限界は、‘考古学’の構想それ自体から発している。Foucaultは、現に作用している権力からの影響を受けては、権力の記述ができないと考え、その影響から絶縁することを第一にした。こうして、明確な方法に支えられた権力分析が樹立され、権力のさまざまな効果が発見されたのは、よいことである。ただし、現に作用している権力と、権力分析の言説とが、どのような関係にあるのかは、視野のうちにはおかれなかった。

しかし、よく考えてみると、Foucaultの‘考古学’が、権力から絶縁していることになるのかどうか、おおいに疑わしい。たしかにその記述は、記述される権力（過ぎ去った、現に作用していた権力）からは影響されないかもしれないが、いま現に作用している権力から、影響されていないという保証はない。いな、むしろ、同時代の権力に影響されない言説などあるだろうか？ あるはずがない、というのが、考古学的な言説分析の前提であった。Foucaultは、歴史家であることによって、同時代の権力にたいする責任を、さしあたり免除されていると言えるだけだ。すると、彼の‘考古学’が、どのような権力のもとでどのような変形を被っているのかは、いつの日かそれが別の‘考古学’によって発掘でもされないかぎり、あきらかにはならないのである。

‘考古学’は、自らを考古学的記述の対象とすることはできない。したがって、他の言説と同様に、同時代の権力に対して無防備である。それならばいっそ、現に作用している権力についての洞察をそなえた、理論的言説を用意すべきではないか？

こうして、われわれは、権力の理論的解明にむかわざるをえない。

権力の理論の本格的な展開は、別稿にゆずるとしよう。ここでは、その予構のいみで、Foucaultの微分幾何学との関連から、どのような理論が構想されるのか、その輪郭を素描する。

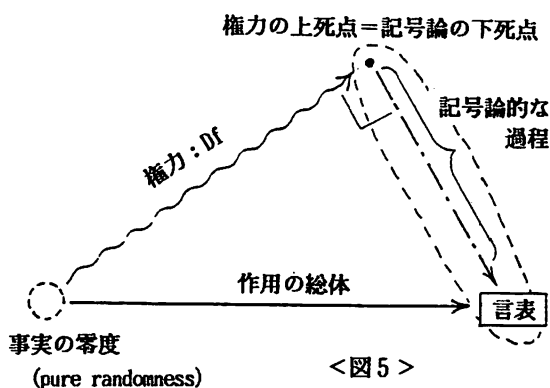
はじめに確認すべきことだが、Foucaultの権力分析は、旧来の権力の理論に完全にとってかわるものではない。彼の考古学をよく理解するほど、きたるべき権力の理論の可能性もみえてくる。Foucaultは近代の古典的な権力理論（そして現代の通俗的な権力理論）が、言語と権力との緊張関係について鈍感な点を衝いた。微分幾何学の文体は、これに対する批判的な工作である。それは、権力との方法的な距離を確保しているが、自分は積極的な言説として登場するにいたっていない。

問題は、考古学的な落差が設定される以前の、言語と権力との real-timeな相互作用に照準することである。Foucaultの権力分析が暗黙のうちのみとっていたことを、権力の理論は明示的に語りなおす。

Foucaultは、〈外の思考〉によって、言表とその配列に接近した。この考古学的な接近は、つぎのように書き直すなら、権力の発見的手続きとして厳密なものとなろう。すなわち、言表をそこにあらしめる作用の単位は、二重である。まず言表は、言語を意味あるものとする形式的な秩序に含まれている。この単位は、記号学的

な考察の対象であった。さらにその外側に、非合理で偶有的な作用の領域が拡がる。Foucault はここに、権力分析を樹立したのだ。

権力の作用域はさしあたり、第一の準位からの残差によって区画されている。だから、言表の出現を支配する、言語内在的な秩序を画定しないと、権力の概念把握にはいたらない。この関係を図示すると、つぎのようである(図5)。



このように、権力への接近の第一ステップは、言表(あるいは、ある身体上に結節する任意の形象)を出現させる作用総体のうち、記号学的記述によっては(可能的に)到達できない残差(residual)、としてつかまれよう。Foucault から継承したこの発見手続きを、われわれは「権力分析の考古学的な原理」とよべる。これにより、社会空間内部に、規則(的な作用)からは導出できない作用としての、(粗)権力の概念を分溜できた。

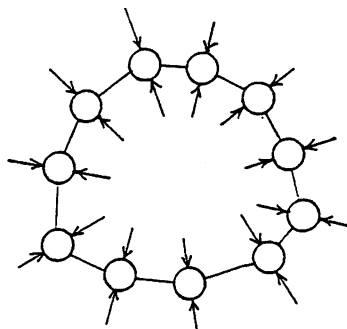
権力をいっそう積極的に概念化する途は、いろいろと危険が付きまとう。それを回避する思案を最後までつくしたわけではないが、暫定的に、つぎのようにもかんがえられよう。

権力に関するひとつのモデルは、ある規則(ないしルール)に随順するひとつのかたちづ

くる調和的な諸身体の配列——ルール環——から出発する(一橋爪 [1985])。このルール環は、当該の言語ゲームが続くあいだ存続する。

ここで、このルール環の構造安定性について考えよう。ひとつの身体をみまう微細な振動に起因して、ルール環は振動する。これに抗して身体をルール環上につなぎとめる、仮想的な力——非規範的で事実的な作用——を想定すれば、それがここで定義せんとする権力にほかならない。この権力は、ルール環の近傍においてめいめいの身体に作用する、といういみで、「微細(micro)な権力」と称することができよう。

微細な権力は、言表をつつむあらゆるルール環の(それゆえ、あらゆる身体)の周辺に、不断に作用している。この作用の方向は、いわば、ルール環に直角である(図6)。



<図6>

さて、ルール環の存在は、単純に観察可能なものではない。それは第一義的には、事実上のものであるというより、ひとつの行為の「前提」である。それは、了解によって、ある身体にもたらされる。とくに構造安定なルール環は、こうした了解が一樣にひとつにおとずれるという、了解の整合性によって支えられていよう。微細な権力が有効に作用するには、こうした了解の円環が介在しなければならない。

あるルール環を、それが含む身体の上の微細な線分によって置き換えることができる。さらに、社会空間内部に現存するあらゆるルール環を、おなじく微細な権力の線分によって、置き換えることができる。このようにして、社会空間を埋めつくす、場としての権力が定義できる。

権力の制度は、いくつかのルール環の複合同時に、はじまる。すなわち、そこでは、ルール環が微細な権力にまみれてあること（あるいは、言語ゲームの事実性）を、別の言語ゲーム

が問題とするのである。法的世界が本質的に、権力の制度であると言いうるのは、このためであった（→橋爪 [1985]）。可視的な法は、場としての権力に、実定的な形象をあたえる。

場としての権力が、ルール環を生成・死滅させ、またルール環の複合が、場としての権力のなかに、権力の制度をもたらす。このマクロな権力の様相を、具体的に明らかにしていくこと、これも、Foucault の微分幾何学がわれわれに課する任務なのである。

文 献

- Foucault, Michel 1969 L'archéologie du savoir, Gallimard. =1981 中村雄二郎訳「知の考古学」（現代思想選10），河出書房新社。
- 1976- La volonté de savoir, Gallimard. =1981 R.Hurley tr. The History of sexuality, Penguin Books.
- 橋爪大三郎 1978 「構造人類学の方法」, (未発表)。
- 1983 「近代政治学の根本問題」, 「ソシオロギス」7:120-128.
- 1984a 「知識社会学の根本問題」, 「ソシオロギス」8:1-10.
- 1984b 「不可視の法/不可視の権力」, 「記号学研究」4:147-159.
- 1984c 「法の言説技術論」, (未発表)。
- 1984d 「予期とゲーム」, (未発表)。
- 1985 「言語ゲームと社会理論」, 勁草書房 (近刊)。
- Lévi-Strauss, Claude 1949 Les structures élémentaires de la parenté, P.U.F. →1967 2 ed. Mouton. =1977/1978 馬淵東一他訳「親族の基本構造 (上・下)」, 番町書房。
- Lukes, Steven 1974 Power: A Radical View, Macmillan.
- 志田基与師 1984 「「権力」の純粹理論は可能か?」, (第57回日本社会学会大会・一般報告配布原稿)。
- 内田 隆三 1980 「<構造主義>以後の社会学的課題」, 「思想」676:48-70.
- 1984a 「フーコーの望遠鏡」, 「思想」718:209-234.
- 1984b 「実証性の新しい輪郭——社会学からみたフーコー——」, 「日本読書新聞」1984年7月30日・8月6日合併号:6面。
- 亘 明志 1980 「M. フーコーの権力論と社会学的課題」, 「社会学評論」31-1:60-76.
- Weber, Max 1921 Wirtschaft und Gesellschaft, J.C.B.Mohr.

(はしづめ だいさぶろう)